

# 故郷世界と異郷世界

— その「世代生産的」構造について —

元明 淳

## 序

最晩年の一九三十年代に考案され、発生的方法における「受動性」の問題系と並んでフツサル現象学の帰趨を左右するテーマのひとつに「世代生産性 (Generativity)」<sup>〔1〕</sup>の概念がある。前者が意識の一切の構成能作に先行する「意味の沈澱」を露呈することを課題としており、いわゆる「受動的総合」の問題として二次文献の多くが費やされたのに対して、後者は個別的意識を踏み越える世代的連関の発生の運動を考察することによって、従来の現象学的端緒の本質的な問題化と拡大を生ぜしめるものである。なるほどこの世代的なもの次元は、体系的にかつ表明的に定式化されたわけではなく、それゆえほとんどの研究者によって今まで主題的に採りあげられることはなかった。しかし『危機』書やとりわけ『相互主観性の現象学』では、世代・歴史・伝統といった術語への言及が増え、人間存在の具体的なあり方、言わば実存的な問題設定への接近<sup>〔2〕</sup>を可能にするような記述が数多く垣間見られる。

それでは世代的なもの次元を、現象学はどのようにして構成分析の俎上に載せることができるのか。筆者は以前、

この世代生産性の概念が問題とならざるをえない次元を、方法論的な観点から論じた。<sup>3</sup> すなわち従来の静態的・発生的な二つの現象学が、事象と方法との相互的な往還運動において必然的に第三の「世代生産的」現象学の遂行を促すということ、および意識が辿ってきた歴史の「再構成」をフッサール自身が、弟子のフィンクとの共同作業においてプログラム化したいわゆる「構築的」現象学の方法によつて根拠づけ、それによつて誕生・死・生殖といった世代生産的次元が、先行する静態的・発生的な現象学をむしろ包括する、より具体的な生の全体的現象となることを主張した。世代生産性に方法的に先行するはずの両現象学は、事象的にはかえつて世代生産性からの「抽象」として人間の生の一側面、その共時的側面しか捉えられず、歴史や伝統のなかに息づいている具体的主観としての生は、この世代生産的現象学の遂行を俟つて初めて真の意味で露呈されることになるのである。例えば、私は自己の「誕生」、つまり自分の生まれることには決して居合わせることができないのであるから、誕生という出来事を現象学的に主題化することは主観性の自己透明性を問題化する次元、すなわち自己反省的経験の限界としてのエゴの事実性に逢着することを意味するだろう。

もつとも「世代生産性」の概念は一見すると、フッサール哲学を貫く「超越論性」の概念と矛盾するようにも思われる。というのも、一般に世代の発生は既にリアルに存在する親・子・孫へと受け継がれていく諸世代の連鎖や、この世での誕生や死といった出来事として世界内部的に (mundan) 理解されているからである。しかしながらフッサールは三十年代の初めに、これら誕生や死という世代生産的な意識形態は単なる偶然的な世界事実ではなく、世界構成的に機能するのではないかと述べ、誕生という意味、死という意味の超越論的な「世代生産性」が可能となることを示唆していた (XVI, 111ff.)<sup>4</sup> したがつて問題は、この両者の概念をいかにして折り合わせ、形容矛盾に陥ることなく「超越論的な世代生産性」の次元を確保できるかということになる。ここで要求されてくるのはもはや、エゴによる自

我論的還元に基づくあの靜態的・發生的現象学の方法ではないことは明らかであろう。それは先述した意識の再構成、構築的現象学の方法に則つた間接的方法としての共—主觀の迂回路、すなわち他者を媒介にした相互主觀的世界の構成という形で営まれる。スタインボックの言葉を借りれば、それは「意味」の相互主觀的、地理・歴史的な、かつ規範的な世代の發生を取り扱うのである。<sup>5)</sup>したがつて本稿の課題は、まずは私ないしわれわれが最も身近に慣れ親しんでいる周囲世界、すなわちその空間軸においては地理的な、またその時間軸においては歴史的な、いわゆる「故郷世界」の發生に焦点を当て、同時にわれわれと同じように自らの周囲世界をもちながら、しかしわれわれにとつては疎遠で接近不可能な「異郷世界」の發生をも視野に収めて、両世界の連関を探ることである。こうした世代生産的現象学の遂行は、個体的意識の狭い領域を越えて、われわれの経験世界の拡大を促すであろうし、また考察の手引きとして例えば民族学や文化人類学といった経験諸学との対話の可能性をも開くはずである。さらにはタイムリーなトピックに即して言えば、いま地球上を覆いつつある政治・經濟、ひいては文化のグローバリズムに抗して、異文化同士が共に理解可能となるような倫理的な次元をも切り拓き、いわゆる「文明の衝突」を回避できる理論的基盤にもなるであらう。

## 一 正常性と異常性

故郷世界と異郷世界という対比と密接に係る規範的な(normative)概念は、正常と異常という対概念である。フツサーが終始一貫好んでよく用いるこの概念は、一般に言われる心理学的・心理療法的・医学的概念ではなく、構成

的概念であることに注意しなければならない。すなわち両概念は、個体と環境世界との生きられた関係を表示しているのであって、狭義には当初から、知覚の構成分析における経験的所与の与えられ方を通して言及されてきており、特に身体知覚の分析において正常性・異常性は個々の器官や感覚ならびに全体としての生きられた身体に適用されて論じられてきた。われわれの経験が妨害を被ることなく、またたとえ被ったとしても修正を施されるとき、あるいは経験の一律調和性 (Einstimmigkeit) によって知覚対象が「最適な (optimal)」状態で与えられるときには、規範としての知覚の最良の状態が実現されており、このケースが正常と呼ばれるだろう。また空間的に遠くのもの、われわれの身近にあるものと比べて「最適性」の度合いがより小さいので、相対的には異常性の範疇に属するであろう。したがって正常・異常のこうした現象を区別するメルクマールは「意味所与」の与えられ方の様態に関係しており、これには大きく四つの様態が含まれる。第一が、一律調和性と不調和、第二が最適性と非最適性、第三が類型性 (Typus) と非類型性、第四が親しみやすさ (Vertraulichkeit) と親しみのなさである。<sup>6)</sup> しかもわれわれにとつて最も本源的に与えられているのは正常性の方であるから、それゆえ異常性は専ら正常性の志向的な一変容と見なされてしまうのである。

しかしこの対概念はフッサールの世代生産的な問題系に移されると、二分法的に固定的なものとして捉えられるのではなく、共—相対的な (co-relative)、流動的な概念として扱われ、個々の身体的な構成分析を越えていくのである。一方で故郷とはなるほど、わたしあるいはわれわれにとつて馴染まれた親しみのある世界であり、典型的に一律調和的で最適な世界であつて、それはいま私が知覚しているもののみならず、私が背負つてきた文化や伝統という点でもそれらを我がものにして (sich aneignen) きたという意味で正常な世界であると見なされている。他方で異郷とはこれに対して、馴染みのない疎遠な世界であり、われわれから見て類型的に調和的でない異常な世界であるとされ

る。例えばアマゾン奥地の未開民族の生活習慣は、われわれ文明国の人間からは奇異で理解しがたいものに映るであろう。しかしこうした正常と異常の区別は単に二元的な対概念として対立するものであろうか。それはフッサールも『危機』書で述べたように複数の生活世界、いわゆる特殊世界の存在を容認し、それゆえ単なる相對主義に陥る危険性をはらんでいるのではないか。こうした批判に対してフッサールは正常と異常の相關性を単に故郷と異郷の關係についてだけでなく、「他者」理解一般にも敷衍して次のように述べていた。「ありとあらゆる段階や境界設定の正常性は全て、可能的な異常性の地平を有する」(XVI,120)と。すなわち、われわれは異郷世界の理解に関してだけでなく、子供や動物、さらには狂人と言われる人々を理解する場合にも、彼らを正常性の志向的変容とみなすのではなく、むしろ彼ら異常なものを通してこそ正常性と呼ばれている領域が確定され、正常と異常の概念の眞の意味が相互に構成されるのだということが出来る。

「世代生産的」現象学は人間と動物との相互理解に関しても有効な方法論として考えられるであろう。(1) 例えば正常な人間の知覚の物差しで異常な動物の知覚能力の価値を測る場合に、猛禽類の鷹とモグラの視覚が人間のそれと比べてそれぞれ「最適性」の度合いがより優れているとかより劣っているとかを、発生的視点に立つ現象学の内部では答えることができない。なぜなら鷹やモグラの視覚は人間の視覚の限界において構成されるのであって、われわれが彼らの視覚になりきることができない以上、彼らにとつての視覚的な意味構成とわれわれ人間にとつての意味構成のいづれが正常か否かを問うことはもともと無理な話なのである。「動物性」は静態的現象学では顕在化されてはこないが、発生的現象学ではその限界性が露呈され、それが正常・異常の相互的限界づけを問題とする世代生産的現象学に移されると、まったく異なつた仕方での分析の組上に載せられるのである。人間と動物の生をそれ自体として見たならば、それぞれの生には本質的な限界や区別はないのであって、両者の限界と思われているものは実は非本質的な限界である

ことが、この世代生産的現象学によつて露呈されてくるのである。ここでは動物性の問題には立ち入らないが、フッサールが後期とりあげた様々な問題群には、このように正常性と異常性との相互的な意味の交錯と変容をもたらすような断片的記述が数多く垣間見られる。そこで、次に正常・異常の相互構成をさらに裏づける根拠を相互主観性論における他者構成の問題の中を探り、これを本論考のテーマである故郷・異郷の議論につなげていきたい。

## 二 他者構成論との類比

以上の正常・異常の相関性の構造は、フッサールの相互主観性論における他者構成の分析においてもパラレルに考察されるであろう。というのも、自我に対する他者は「自己固有性 (Eigenheit)」に対する「異他性 (Fremdheit)」として特記づけられており、同時にこの異他性は故郷に対する異郷の経験についても、「親近性」に対する異他性の経験として包括的に使用されるからである。他者構成の問題については既に数多の研究者によつて論じられてきており、委細についてはその主要著作である『デカルト的省察』の内部ですら、方法論上の不整合性(静態的方法と発生的方法との混合)などの指摘によつて様々な見解が乱立していることは周知のとおりである。しかしここでは、著作ごとの内在的な批判に立ち入るよりは本論考の課題である故郷・異郷の連関に資する程度に、他者問題の大枠を世代生産性の構造と結びつけて見ていきたい。

フッサールは後年『デカルト的省察』第五省察で展開された他者認識の理論を反省的に捉えなおし、例の感情移入 (Einfühlung) の問題を「虚構的 (fiktiv)」発生の問題として自己弁明を行っていた。第五省察では、既に構成されてし

まっつている周囲世界を前提したうえで、他者にまっつる一切の志向性を排除したあとに獲得される純粹な私の「固有性領域」を取り出して、ここから他のエゴの存在を組み立てていくという段取りを踏む。すなわち、既に發展（發育）した主観性における私の「第一次性（Primordialität）」の領域内にたち現れる「他の」身体物体と「私の」それとの類比によって、対化的連合が起こり、私に直接与えられている心的生を統覚的に他の身体物体に移し入れることによって他のエゴ（他我）を構成するという類比的統覚の理論がそれである。この理論に対し、こうした手続きは抽象的であつて、基づける働きをする知覚体験から出發して他者の存在を組み立てていくという意味では、時間の自己構成を抽象した靜態的分析の方法と同様、何か人為的な操作を施しているのではないかとする批判は免れえまい。なるほど、われわれの意識が先入見に満ちた他者についての様ざまな志向性をまもつている以上、これらをつたへん括弧に入れて世界を見ることを学びなおすという現象学的還元の方角性それ自体は間違つてはいないであろう。しかしながらそれにも拘らず、ここには分析における種の前提が存し、かつ十全な意味での發生論的視点が欠如しているように思われる。つまり既に出来あがつた周囲世界と展開済みの主観性から他者の意識を構成していくというのは、言わば大人の意識を前提とした能動的な感情移入のレベルの要件であり、そのことはフッサール自身が晩年に採りあげることになる受動的な感情移入の分析を俟つて初めて、十全な他者構成論の完成へと導かれるはずであろう。したがつて、私の固有性領域から出發する先の類比的統覚の理論は結局のところ、あくまで私からする自己二重化の作用、一方向的な構成にすぎないのであつて、しかも「前言語的な」知覚構成のレベルにとどまつており、<sup>5</sup>發生的方法が採りいれられているとは言え、まだ靜態的現象学の枠内における所与の他者統覚の志向的解明に終始していると言える。フッサールの反省の弁はこうである。「他者の付帯現象<sup>6</sup>他の身体物体の背後に心的生を自己投入する<sup>7</sup>」の發生が、他の主観性なしの周囲世界の先行する發生を前提しているとか、あるいは既にこのような周囲世界が構成されていると

いうことを、予め私は前提することはできない」(XIV.477)括弧内引用者補足)と。

この文言は先の第一次性の概念、すなわち他者に関わる志向性を全て排除した後に獲得される純粋な私の「固有性領域」が、実は私だけのものではなく、発生的には他者の側からの構成、つまり共構成をも同時に含んでおり(XV.603)、共通の周囲世界を仲立ちとして自我と他我とが相互に分極化しながら同時に成立してくる「癒合的な」系に他ならないことを示している。フッサールは先の固有性領域をこの場面では複数形と呼び(XV.594)、しかも幼児が世界表象を如何にして獲得するのか、その超越論的構成の問題を現象学の必須の課題として掲げていたのである(XIV.115f, XV.583, 620)。例えば幼児の世界表象の成立には他の自我主観、とりわけ母親との間で、何かあるものへと「衝動的に」向かう先―自我的な匿名的、受動的な感情移入といったものが既に働き出していることが指摘されている。しかも、この何かあるものというのは、発達心理学の知見によれば何らかの「情動の」共有として、幼児と母親との間で分かちもたれていることが次第に明らかになってきている。このようにみると、私と周囲世界と他者とは全き意味においてはむしろ三位一体となつて同時に構成されてきたのであり、第一次性の概念も自我を欠いた最も受動的な段階で、予め他者を既に含んでいるものとして、その意味が変容されなければならないであろう。自己固有性の領域は最初からその底が破れているのであつて、したがつて私は自己の感受性の内部に「他者性」を見出すのである。

以上の、自他の相互構成という相互主観性論におけるパースペクティブの発展は、単なる認識関係における狭い「我―汝」の関係を越えて世代生産的現象学に移されると、同様に正常と異常との相補性、ひいては故郷世界と異郷世界との相互構成の問題にも敷衍されるであろう。結論を先取りすれば、自我による他我の一方的な構成が不可能なように、故郷による異郷の一方的な構成もありえないということである。確かにここでの通時的な他者の意味の構成を扱う発生的現象学と世代生産的現象学の方法とは異なるが、前者において自己固有性が実は「他性」によつて侵食



されている事態と、後者が狭い個体的意識、および自己反省的経験を越えていく事象を取り扱うという点では、主観性の自己透明性を問題化したという意味において同一の構造的変容を読み取ることもできるのではないだろうか。そして実のところ、先述の幼児の世界構成の分析はフッサールのモナドの発展的階層論においては、フイंकも指摘していたように方法論的には構築的現象学<sup>(1)</sup>またはその一部である世代生産的現象学<sup>(2)</sup>の要件に含まれることになる。<sup>(3)</sup> 幼児、特に生まれたての新生児や胎児を分析の俎上に載せるとき、現象学を行う者が、想起によって自分の子供時代を回想し、または「感情移入に基づく解釈の変容の限界」(XV, 117)としての「誕生」については間接的な経験知、例えば存在論的な手引きとしての心理学を援用しながら、分析の対象である子供(他者)の意識を再構成するという構図が浮かびあがってくる。つまり正常とされる私(大人)が、異常とされる子供を理解することがかえって、既に展開(発育)してしまった大人の意識の基底が逆照射されるという図式である。ここでは分析平面での相互構成(子供―母親)のみならず、それと交差して発生的・世代生産的な方法上の相互構成(正常―異常)という理解の構造が見て取れるであろう。また世代生産的な意味一般の構成については、それが単なる認識的な我―汝関係や、抽象化された無差別的な「われわれ」という共人間性ではなく世代的連関における「われわれ」の主題化であり、<sup>(4)</sup>例えば私が自分の生まれた子供を「息子」として構成するときには、同時に私の方も息子によって「父親」として構成されるという事態が見出されるのであって、ここにもやはり自他の相互構成という位相を確認することができるだろう。

いずれにせよ、自他の構成と以下で述べる故郷・異郷の構成がそれぞれ相補的であることを、もう一度フッサールの次の言葉で確認しておこう。「私たち、および万人のなかに潜んでいる特筆すべき事柄は正常性(Normalität)であるが、しかしその正常性は異常な(anomal)ものが共に生じてくることによって初めて際立たせられるのである」(XV, 165f)。本稿では以上の規範的概念である正常・異常の共構成という本旨を故郷・異郷世界の分析にも援用し、相

互的な世代化、世代生産性の成り立つ次元を見ていくことになるが、ただしその前にさし当たって、正常性の枠内における私あるいはわれわれの故郷世界の世代生産性、その相互主観的な基盤を予め分析して、前者の考察の手引きを準備しておきたい。

### 三 超越論的「誕生」の主題化

われわれは自分の故郷に生まれ、父母、祖父母そして先祖から受け継がれてきた歴史や伝統を我がものとしながら、その故郷世界に慣れ親しむと同時に一律調和的な世界を形成し、さらには自分の子供、孫、そしてまだ見ぬ子孫へと文化や何らかの精神性を伝承させていく。しかしながらこうした世代性は、私を含めてわれわれがこの世界に産み落とされることよって初めて更新されるのであって、そもそも「誕生」ということがなければ諸世代は生産されてはいかないだろう。したがってまずは、この誕生概念そのものを現象学的に分析することで、「超越論的」世代生産性が可能となる一局面を提示し、故郷世界のもつとも原初的な発生の現場を見よう。というのも、フッサールは人間の誕生（および死）を世界構成的に機能するものとして超越論的に考察することの可能性を示唆していたのであるから。発生的現象学においては、超越論的自我は生まれることも死ぬこともないと言われたのであるが（XVI 377-8）、誕生と死は世代生産的現象学に移されると前者の構成分析的次元を離れ、まさに「与えられることのできない」限界現象としてのみわれわれに与えられるようになるのである。

一般に誕生は、われわれの日常的な生においては世界内部の出来事として、例えば母親の体内での妊娠、そして病院

でのお産、さらには引き続く祝い事等々として語られるのが常である。それは既に存在している「世界の中から(aus)」生まれる出来事として言わば外部の三人称的な視点にたつて観察されるものであり、したがってリアルな存在の地盤としての世界を予め前提している。こうした理解は既に世界信憑のもとに成り立つ「世間的な(mundan)」理解の仕方にとどまっております、誕生という現象が世界構成にとつてもつ意味は何ら明らかにされていない。しかし、私にとつて自分の生まれることは経験不可能であつて、それゆゑ私が自己自身の誕生の生起に決して居合わせる事ができない以上、この誕生概念を超越論的に主題化するためには別種の新たな現象学的反省が必要となるだろう。というのもわれわれは結局のところ、「他者」の誕生を追体験し自ら生き抜くことによつてしか、すなわち共主観による媒介的経験によつてしか、自己自身の誕生に接近できないからである。フッサールはこの事態を「感情移入的解釈の変容の限界」として充分に自覚していたのであり、彼が「世界の超越の本質は、世界が他者を媒介にして、および世代生産的に構成された共同主観性を媒介にして構成されるということのうちにある」(Ms C17 32a)<sup>12</sup>と主張する所以もここに  
ある。

フッサールは既に『デカルト的省察』の末尾でこの誕生概念に触れ、それを「生まれる(auf die Welt kommen)」ことと表現し、その研究に個体の生理的發育と系統発生を扱う精神物理的考察と、これと並行する心理的な系統発生を扱う心理学的考察、そして最後に自我による世界表象の發生的構成を扱う現象学的な志向的分析の三つの課題を含めて、それら全てが超越論的哲学としての構成的現象学にとつての本質的問題を暗示していると述べていた。それゆゑ、これら三つの課題が相互に連関してエゴの構成的歴史についてその超越論的發生の原始源(誕生)にまで遡つて達成されるならば、それは發生の高次の課題としての世代生産的現象学の要件となるはずである(1968)。さて、この「生まれる」ことは二つの移相を含んでいる。一つは先述したように、既に出来上がっている世界から生まれるといふこ

とであり、ここには言わば完了済みの展開しきった世界が前提されており、誕生はその世界における実在的出来事として把握されている。われわれは既に存在するこの世界の中での他者の誕生という出来事を通して、世界構成的に機能する自己の誕生を間接的に推定することができるだけである。この完了態の世界における様々な経験知、例えば心理学や生理学などの知見が生活世界の「手引き」機能としての役割を担い、誕生概念の内実をより豊かにしてくれる。例えば誕生は、母胎の中の無差別の状態から客観的世界へと自らの基盤を置くことであるから、新生児が最初に行う「呼吸(Atemzug)」という現象は内と外との差異が身体的に初めて体験される所以の最初の根源分割であり、したがって最初の世界関与であると同時に最初の自己反省形式、いわゆる根源的な自己触発と呼ぶことができるだろう。<sup>(13)</sup>では、こうした「志向的心理学」の迂路を介して見出される誕生意識の超越論的意味とは何だろうか。

それが先の「生まれる」ことの二つ目の位相である、私がこの「世界へと(Σ)」生まれるという事態であり、ここでの私の相関項である世界とは既に出来上がった完了態の世界ではなく、言わば「生まれつつある」状態の世界に他ならない。すなわち、私は世界の中で生まれるのではなく、世界と共に生成しつつ世界へと生まれるというわけである。これこそが誕生概念のもつ超越論的構成の真の意味であろう。シュエスも述べているように、この誕生によって初めて私は世界に参入し、静態的・発生的方法によって深化された例の志向性が、すなわち世界へと構成的に向かう根本条件としてのエゴ・コギト・コギタートゥムという構造が可能になるのである。<sup>(14)</sup>この意味での「誕生性(Gebürlichkeit)」ないし世代生産性は、まさに生活世界の「地盤」機能として私の世界意識を可能にしている根本条件に他ならない。さらにまた、翻ってこの誕生の生起には、私の生まれることに先立って関与した父や母の生、ひいては祖先の生が共に世代的地平として組み入れられるのであるから、誕生とは単なる偶然的な世界事実でもなければ、遍時間的なイデアの本質でもなく、私の世界への帰属を、本質必然的に成り立たしめている絶対的事実、言わば超越

論的「原事実」と呼ばれるべきものである。ヴァルデンフェルスも主張しているように世代生産性とは、私が単に他者と共にこの世界へと生まれ出てこの世界の中に存在するだけではなく、他者にもその出自が由来し (Herkommen)、他者において生き続ける (weiterleben) ということを意味する。<sup>15</sup>なるほど確かに、誕生は私の自己反省的経験さらには想起的経験によつては決して与えられないがゆえに、あくまで私の推定の地平に属してはいるけれども、私が徹頭徹尾、世界と関係しているという実存の意識、つまり世界内存在としての世界意識を究極的に可能にしているという意味では必然的なのである。

一方で、「死」もその未来方向においては誕生の場合と同様な考察を行うことができるだろう。ここでは割愛するが、例えばハイデガーによる死の分析が、われわれ人間の実存的な意識の基盤をなすものとして、世代生産的現象学の内容の豊饒化と展開に何らかの仕方でも資するものとなるかもしれない。当初、発生的現象学のもつとも高次の段階に位置づけられた世代生産的現象学は、このように従来の構成的現象学の狭い枠内における、意識の「抽象的な」内的歴史の次元をはるかに越えた超越論的領野を切り拓くことができるのであり (XV, 138, Anm. 2)、したがって私の超越論的生は単に類型的構造におけるノエシス・ノエマの志向的能作や時間の自己構成といった志向性の働きによつてのみ営まれているのではなく、究極的には他者を媒介とした世代的地平によつて貫かれ、世界のうちに深くその根を下ろしているのである。換言すると「われわれがそこにおいて常に生きている所以の世界意識は、なんら直接的なものではなく、むしろわれわれの世代生産的な生の発生によつて媒介されている」<sup>16</sup>ということができよう。

#### 四 故郷世界と異郷世界

われわれは、差し当たっては空間的・時間的に有限な故郷世界のうちに存しているが、そこだけに留まることなく自らの世代生産的地平を未知の世界領域、つまり異郷世界へと拡大していくことができるだろう。フツサルも次のように述べている。「私にとって予め存在する世界、常に既に予め与えられた世界は、私の意識生のうちで（私にとつての）存在妥当と存在証示を獲得する、私のおよび彼らの人類に属する他の人間たちによつて共に構成されている」(XV.169)と。しかも同時にこれら他の人間たちには、先述したように正常とされる私、そしてわれわれだけではない、原始民族や狂人と呼ばれる人々も含まれ、さらには動物までもが、私の世界を共に構成する「故郷の仲間(Heimgenossen)」ないし広い意味での私の「共人格」と見なされるようになる。もちろん、われわれ人間という最初の出発点は、私によく知られている慣れ親しまれた狭い領域、つまり故郷世界の「われわれ」ではあるけれども、この有限性における私あるいはわれわれの経験は、異他的な経験を自らに取り込むことによつて拡大され、この世界についての新たな経験統一を打ち建てることのできるものである。例えば、われわれは犬についての様ざまな振る舞いを研究することで、鼻のよく利く獣であり、場合によつては番犬や盲導犬となつて非常に役に立つ動物になるという知識を手に入れ、そうして彼らについての経験とわれわれ人間的経験との間に何らかの総合を打ち建てることによつて、われわれの経験世界を拡大していくことが可能となる (XV.167)。

またわれわれは、先述したように自己の誕生や時代、死、世代的なものという通時的な時間軸においても、かつて自分が生まれ、いつかは死んでいく者として自分自身を理解するし、さらには私よりも前に生まれた年配の人や私の知の遥かに及ばない祖先や、逆に私の後に、あるいは私の現在の同胞に引き続くであろうような諸世代についての経

験の推定や予料をもつことができる (XV, 168f.)。さらには、われわれは個人としての誕生や死についてのみならず、ある文化の誕生や死についても語ることが許されるだろう。すなわち「個体的な自己時間化は、社会・歴史的な世代生産性に屈服するのである」。(18)このように、世代生産性と伝統とは共属しており、それが共同化され人間化されたわれわれの世界、いわゆる相互主観的世界の基盤を形成しているのであるから (XV, 205)。こうした世代生産的次元を主題化することは、現象学の出発地点である「E」の首位性に疑問を投げかけることになるのではないだろうか。というのも、世代生産的現象学は規範的に重要な「意味」の地理・歴史的な相互主観性の地平、その具体的な生活世界の構造から出発するのであって、このような意味での「世代生産的な相互主観性」(XV, 166)の問題化は決定的に、静態的、準発生的な、かつ『デカルト的省察』第五省察で探求された「E」による基礎づけを本旨とする狭隘なデカルト解釈を越えていくからである。

さてフッサールは、われわれの経験世界が何らかの総合統一によって拡大していく事態をさまざまに記述していた。故郷世界と異郷世界との連関について言うと、例えば「故郷の人類と他者との関係が、超国家 (Übernation) の統一へと導いていく」とか「自らの他者を自らと結びつけていく、より高次段階の故郷の全体としての超故郷的な (überheimisch) 全体を進捗的に構成していく」といった表現によって、諸々の人類が単なる並存関係ではなく、一つの全体紐帯へと結合されていく可能性を提示している (XV, 170)。われわれは誕生の後、まずは自らに最も身近な故郷世界に編入され、それについての知をさまざまな仕方でも拡大していくことで故郷世界を慣れ親しまれたものとして構成していく。これが故郷世界を絶えず「我がものとする」こと (Aneignung)、「または「我有化 (appropriation)」(19)のプロセスと言われる。われわれは差し当たりまず大抵は、この故郷世界のうちで自国の言語や教育、さまざまな習慣・儀礼などを身につけ、さらには当該の故郷が背負ってきた歴史や伝統までも自らに引き受けつつそれらを内在化してい

くのである。しかしこうした我有化は故郷の内在化と同時に、それと並行する異郷の外在化というプロセス、つまり異郷の切り分けを伴っていることに注意せねばならない。例えば「正座」という日本民族としての習慣は、それらからのものとして最適化し類型化することによって、正座を行わない他の民族を私に疎遠な馴染みのないものとして、すなわち異郷として故郷から切り分けるのである。これを「故郷における異郷化」と呼んでおく。まずは、われわれの故郷の内部で我有化のプロセスを通して、暗々裏に異郷がそれとして「疎外」されるのである。また平安時代には女性もあぐらをかいていたということからすれば、現代の女性が正座を我有化することは、遙か昔の異郷世代を自らの属する故郷世代と異なるものとして「異他化」することになるであろう。このように、故郷世界と異郷世界とは共構成されるのであり、地理・歴史的に相互に世代化されるのである。ただし両者は、あくまで非対称的であつて、リバーシブルではなく、この我有化によって相互に限界づけられるというわけである。したがってこの事態が明らかに、既に(一)で触れた正常と異常の相補性、共構成という観点と重なるということが知られるだろう。

ところで、こうした故郷と異郷の相互構成をフッサールは次のように述べている。「最初の形式における総体宇宙が故郷世界として際立ってくるのは、既に他の故郷世界、他の民族〔異郷世界〕が共に地平のうちにある場合のみである」(XV.176)と。しかしながらこの文言は他方で、故郷世界に属する私あるいはわれわれが異郷世界と出会うときの「異郷における故郷化」という事態をも含んでいることに注意しなければならない。すなわち、異他的な人類が、異他的な民族として構成されることによって初めて、私およびわれわれにとって、われわれ固有の故郷の仲間たちや民族の共同体が、われわれの人間の妥当をもった世界としてのわれわれの文化世界に関して構成されてくるのである(XV.214)。フッサールは、有限性のうちにある故郷から異郷への世代生産的な知の拡大の様式を「踏み越え(Uberschreitung)」、「侵犯(transgression)」と呼んでいる。もともと、フッサール自身は故郷世界による異郷世界の出



会いの様式を入念に仕上げてはいないのだが、この事態をスタインボックは、先述した「故郷の我有化的経験による異郷の共構成」と並んで、「異郷の侵犯的経験に基づく故郷の共構成」と見なしている。<sup>20</sup>それまでは、狭い故郷世界のうちにどっぴりと根を下ろし、自らの習慣や経験知について全く自覚したこともなかった自分が、異郷と触れ合うことによって初めて、自らの故郷を相対化することができ、そうやって故郷は故郷として見えてくるということがありうる。例えば、異文化との出会いが決定的に、私の故郷的価値や「自己固有性」を揺さぶり、それによって初めて故郷が異郷と違うものだという限界の設定が可能となる。このようにスタインボックは、故郷と異郷との限界設定は、前者の我有化的経験と後者の侵犯的経験という二重の構成様態を通して初めて行われ、限界は限界として顕わになると主張するのである。そういう意味で「故郷と異郷は本質的に、共—相対的 (correlative) であり、相互に基礎づけあい (co-fundamental)、また相互に世代生産的 (co-generative) なのである」。<sup>21</sup>

もっとも、このようにして故郷世界と異郷世界との相互構成が可能となるためには、その必要条件として、それぞれの知覚世界に共通な物的世界が基盤となっていないなければならないし、いわゆる生活世界の基底構造としての空間・時間性や、それらを構成する身体的キネステーゼの構造などに何らかの共通性が認められるということもありうる。それはちょうど、同一の対象を存在信念の相関者として、その多様な諸現出 (射映) が可能となるのと類比的に、故郷と異郷との対比もそれぞれが他に対しては異郷であって、それら複数の異郷世界、または生活諸世界が可能となるのは、やはり同一の物的世界、知覚的自然を存在の意味の核としているからであろう。なるほど異郷に属する他の民族もわれわれと同じ「同一の太陽、同一の星、同一の大地」を見ていることには変わりなく、これらを認識のある種の普遍的地平として所有していることは間違いない。これについては、空間・時間性などの「生活世界のアプリオリ」を取り扱う存在論的学科、いわゆる「生活世界の存在論」の課題となるであろうし、またそれを手引きとした超越論

的な世界構成の課題とも関係してくるだろう。しかし各々の民族は、物体的自然を単に見ているというよりはやはり、具体的には精神的意味を伴った、否それによって貰かれた形象を直に把握しているはずであって、各々の文化は互いに相手にとつては異他的であり、多様性や相対性を免れえないはずである。したがって本稿での議論はあくまで、故郷世界が異郷世界と出会うことによつて初めて開かれてくる、もう一段上の世界、つまり個々の生活諸世界がそれとして自覚されると同時に、相対化されるような唯一の世界の構成にあるのであり、第一の相互主観的世界（自我―他我）との類比で言えば、言わば「相互民族的な (intervolklich)」世界の構成にあるということができる。<sup>12)</sup>そして世代生産的現象学がこうした唯一の世界の構成を実現した暁には、世代生産的意識の志向的相関者は「大地地盤 (Erdboden)」――フッサールの構成的現象学において説明された志向性の原根拠――ということになるであろうし、平たく言えば各民族が等しく自らの住处としているこの唯一の「地球」ということになるであろう。<sup>13)</sup>すなわち、世代生産的現象学の最終形態は、われわれをいわゆる地球市民的意識の自覚という方向へと駆り立て、人類の共生と平和という倫理的、ひいては政治的帰結をももたらすに違いない。<sup>14)</sup>

世代生産的現象学はこのように、個体的意識と故郷的意識の双方に共通する「自己固有性」の特権を剥奪し、それを越えたところにある世代生産的な意味の地理・歴史的な運動の生成を記述するのであつて、故郷世界と異郷世界との非相称性、転倒不可能性を保持しつつも、相互に共に世代化される (co-generate) プロセスを取り扱うのである。それゆえ、この対比は単に空間的・地理的な共世代化にとどまらず、時間的・歴史的な共世代化にも等しく当てはまるであろう。つまり、「故郷的世代」のうちにいるわれわれは、単に過去・現在のみならず、未来をもまた「異郷的世代」として共構成し、それに応答しつつ参与するように呼び出されているのである。それは環境問題にも代表されるように、現代の世代が過去の世代に対してのみならず、未来の世代に対して如何なる責任や義務を負うかといった、いわ

ゆる世代間倫理の問題にもつながるだろう。というのも、世代生産性のプロセスは諸世代を越えて生起するプロセスであり、したがってまた社会的、かつ歴史的な運動だからである。<sup>(25)</sup>

## 結語

フッサールは世代生産性の現象学を体系的に展開しなかつたが、今まで見てきたように晩年の「相互主観性」をめぐるさまざまな論述の中には、世代・歴史・伝統といった術語が数多く散りばめられており、それゆえ彼が明らかに従来の超越論的現象学の狭い枠組みを乗り越えていく何らかの視点、構想を抱いていたことは想像に難くない。ただしこの発展的試みは超越論的現象学の根本を揺さぶるか、あるいは軌道修正をわれわれに迫ってくる微妙な問題をも含みもっている。それは冒頭でも示唆しておいたように、現象学の「超越論性」と世代性のもつ「世界内部性（世間性）」との相反する関係、および本論で触れた自己反省的限界としての世代生産性の問題化である。しかしこの試みが超越論的現象学の新たな可能性を切り拓く側面を持つているとするなら、それは世代生産性の次元が抽象的な人間性を問題にするのではなく、歴史や伝統に巻き込まれた具体的な人間の存在様式、つまり実存を問題化するという点で、世代生産的現象学の営みをフッサールの隠された意図を実現する積極的な試みとして評価しうるのではないだろうか。

その際さらには、世代生産的現象学を行う当然の現象学者自身も実はこの世代性の中に、具体的には歴史性や、異郷世界と関係づけられた故郷世界のうちにあつて、故郷の仲間と共にこの世代性を担い、共に生き抜いていく遂行者でもあるということが顧慮されねばならない。現象学のこの引き受け、自らの世代的運動への参与そのものは、従来の

現象学の記述的性格を規範的次元へとシフトさせ、倫理的な行為の責任という方向へとその意義を展開させずにはおかないであろう。<sup>(15)</sup> 例えば、故郷と異郷の共構成という現象学的洞察が、現在のグローバリズムのもとでのアメリカ一極支配に抗して、イスラム圏の国々との真のコミュニケーションを図ることに原理的な側面で寄与するならば、自由や平等という一方の故郷の価値の押しつけではなく、異郷と出会うことによって更新される新たな故郷の価値といったものに、われわれは目を向けていくべきではないかと思われる。

今後に残された課題を一つ。既に見たように異他性とは、「与えられることのできないもの」としてのみ与えられる現象、「接近不可能なもの」としてのみ接近可能な所与なのであるから(XV,63)、世代生産的現象学は本稿でテーマとなった「誕生」や「異郷世界」といった現象学的所与の「開示的」方法であるだけでなく、宗教的次元を自らの所与としうる「啓示的」方法をも併せもっている。<sup>(16)</sup> 本稿ではこうした世代生産的現象学と倫理的、宗教的次元との交錯についてはその問題性を指摘するに留め、稿を改めて論じることにはしたくない。

注

(1) この術語には Generation, generative と共に生殖、世代、発生などの多様な意味があるが、ここでは Genesis に関わる genetisch (発生的) と区別し、また単なる生物学的な生殖の含意を避け、さらに世代を生み出すという働きの側面を強調するために、「世代生産的」と訳した。

(2) Vgl. Van Kerckhoven, G., Eugen Finks *Phänomenologie der VI. Cartesianischen Meditation*, in: *Phänomenologische Forschungen* Band 30, S. 104f.

(3) 拙論「フッサールにおける『世代生産的』現象学の可能性について」(『倫理学研究』第33号 関西倫理学会編) 所収。

なお、エゴの構成的歴史を再構成する「構築的 (konstruktiv)」現象学の方法と、従来の自己反省的直観の枠内で実施される「退及的 (regressiv)」現象学の方法との区別については、前掲の論文、ならびにフィインクの『第六省察』の以下の章を参照された。

Vgl. Fink, E., *VI Cartesianische Meditation, Teil I. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre*, in: Husserliana Dokumente Bd IV/1, 86, §7.

(4) 以下、フッサールの既刊著作における引用参照箇所のローマ数字は全て『フッサール著作集 (Husserliana)』の巻数を表し、ページ数をアラビア数字で表す。また、未公開草稿からの引用は Ms の記号を用いる。

(5) L. Embree et al. (eds.), *Encyclopedia of Phenomenology* (Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers, 1997), Steinbock, A., GENERATIVE PHENOMENOLOGY, p. 261.

既に「世代生産性」の概念に着目し、世代生産的現象学の発展的可能性を表明している A・J・スタインボック(アメリカ)は、静態的・発生的・世代生産的なそれぞれの現象学の歩みを抽象化された前段階の乗り越え、一連の克服の過程とみなし、誕生と死は先行する発生的現象学においては還元元的所与性を乗り越える「限界現象」として示されるが、これが世代生産的現象学に移されるとそれまでの限界性格を失い、超越論的生の全体性をなす最も具体的な現象として分析の俎上に載せられると説く。スタインボックの他に表明的に「世代生産性」の概念に着目しているのはクリスティナ・シユエスであるが、両者の思想については本論稿の中に組み入れたので、本論ならびに注を参照されたい。

(6) *ibid.*, p. 262.

(7) A・J・スタインボック「限界現象と経験の限界性」(神谷英二訳)『理想』二〇〇〇年一〇月九一六号 現象学の二〇〇年所収 二二二—二二三頁参照。

(8) 浜渦辰二『フッサール間主観性の現象学』創文社 二五〇頁参照。

Vgl. Held, K., *Heimwelt, Fremdwelt, die eine Welt*, in: Phänomenologische Forschungen Band, 24/25, S. 306ff.

(9) 故郷世界の相互主観的な発生の現場は、当然のことながら言語の習得と密接に関わっているはずであり、われわれが子供の頃から自国の言語に慣れ親しんでいくことによってむしろ、言語の方がわれわれの物の捉え方や思考そのものを規定していくことができる。また、他者への感情移入の理論だけでは私に先行する、あるいは引き続く者たちとの共同体を構成することは不可能であり、そういう意味で言語、特にコミュニケーションや物語(narrative)といった媒体は故

郷世界の基底を形成している根本条件に他ならない。こうした言語と世代生産性の絡み合いについてはこれ自体が固有のテーマとなるので、稿を改めて論じることにはしたい。

「人間の共同体的生は、言語共同体の生として可能である。……人間の故郷世界(Homeland)は、根本的に言語によって規定される」(XV.224)。

(10) Fink, E., ebd., S. 70.

「この世代生産的連関は、新生児、あるいは一般に、初期の子供、言わば本来の子供の予備段階として解される、胎児をも包括する」(XV.178)。

(11) Fink, E., VI *Cartesianische Meditation, Teil 2. Ergänzungsband*, in: Husserliana Dokumente Bd. II/2, S. 274, 320.

(12) Vgl., zitiert nach Zahavi, D., *Husserl und die transzendente Intersubjektivität — eine Antwort auf die sprachpragmatische Kritik*, in: *Phaenomenologica*, Bd. 135, S. 27, 80.

(13) Vgl., Schues, C., *Generative Probleme als transzendentaler Leitfaden?*, in: *Phänomenologische Forschungen*, neue Folge 2. halbband, 1997, S. 215f.

否むしろ、子供は胎児の段階から最も原初的な世界を所有しているのであって、既に母親の羊水の中で自らのキネステーズを発動させており、手足を動かしながら「もがく」(strampeln)によって、第一次性(Primordialität)の原段階を形成しつつある(XV.604)。また最近の乳幼児研究によれば、胎児の様ざまな知覚能力の存在がクローズ・アップされており(胎内での音、とりわけ母親の声の知覚など)、これが意識の最も原初的な形態としての先—自我の現象学的傍証にもなるだろう。

(14) Schues, C., ebd., S. 216.

(15) Waldenfels, B., *Das Zwischenreich des Dialogs: Sozialphilosophische Untersuchungen in Anschluss an Edmund Husserl*, Den Haag 1971, S. 346.

(16) Landgrebe, L., *Das Problem des Anfangs der Philosophie in der Phänomenologie Husserls*, in: *Faktizität und Individuation*, 1982, S. 34. 「よむな人間も、彼が自分の世界意識の中で生きている限りで、世界に対する現実の自我主観である限りで、それ自体として無限に開かれた世代生産的な連関における、諸世代の連鎖や分岐における人格なのである」(XV.178)。

(17) 「この私の周囲世界は同時に、共現代的な、共過去のな、共未来的な他者にとっての世界でもあり、各人は己れ固有の

世界経験を持ち、持った、そして持つのである。」(XV, 218)。

(18) Steinbock, A., ebd., GENERATIVE PHENOMENOLOGY, p. 261.

(19) 故郷世界を「我がものとする (sich aneignen)」プロセスをスタインボックは「我有化 (appropriation)」と訳し、また、異郷世界への「踏み越え (Überschreitung)」を「侵犯 (transgression)」と訳している。

Vgl. Steinbock, A., ebd., S. 263.

(20) スタインボック「限界現象と経験の限界性」二三五～二三六頁参照。

(21) 前掲書二三五頁参照。

(22) 浜渦辰二 前掲書 二七六頁参照。

なお、民族の多様性や相対性を越えた「唯一の世界」が本当に可能であるかどうか、民族の異他性はそれが接近不可能でかつ譲渡不可能であるがゆえに、高次の統一へとは総合されえないのではないか、という異論も十分に考慮せねばならないが、ここではそうした言わば理想的で平和的な「超民族的な」国家の実現という方向には踏み込まずに、あくまで故郷世界と異郷世界とが転倒不可能でありながら相互の出会いを通じて互いに境界づけられるような相互理解の地平が準備されたということに留めておきたい。

(23) 世代生産性の概念は生活世界の概念と密接に関わっている。周知のように生活世界は世界を存在者の全体と見なす存在論的概念と超越論的概念とに二分されるが、後者はさらに世界を認識の可能性の活動空間と見なす「地平」概念と「地盤」ないし「大地」の概念とに区別される。地平がどちらかと言えば、意味の先—主題的な領域を提示しており、言わば認識の「水平的 (horizontal)」理解が強調されているのに対して、世代生産的現象学への途上において決定的となるのはむしろ、大地、地盤としての生活世界の様態の方であろう。というのも、地盤はわれわれがそこから立ち現れ出て、かつその上にも乗っている所以の自然的領域 (Territorium) であって、コペルニクスの科学によって「飛ぶ箱舟」として客観化される以前のわれわれの自然の住処、母なる故郷だからである。その意味で後者は前者の地平概念の「垂直的 (vertikal)」理解と違うことが言えるだろう。

(24) Vgl. Held, K., ebd., S. 335.

例えばこの点に関して、ヘルトは次のように述べている。「かくして、唯一の世界の有限性を現象学的に省察することは一つの政治的な帰結を持つ。現象学的省察は、共生する人類の高次のもしくは低次の段階のすべての故郷世界に対して、

これが個々の諸民族であれ、『ヨーロッパ』や『イスラム世界』というような民族グループであれ、他の領土を何らかの仕方で文化的に『占領』しようとする関心を捨てよ」と要求する。そのことが平和の本来の基盤であろう」と。

- (25) Vgl. Schües, C., *Passivität und Generativität nach Husserl*, in: *Philosophische Rundschau* Bd. 49, S. 143.  
(26) Steinbock, A., ebd., *GENERATIVE PHENOMENOLOGY*, p. 264-265.

Schües, C., *Generative Probleme als transzendentaler Leitfaden?*, S. 217.

- (27) スタインボック「限界現象と経験の限界性」二二七—二四二頁参照。